

都市の雨水管理

米国のグリーンインフラに学ぶ

ランドスケープアーキテクト (ASLA)

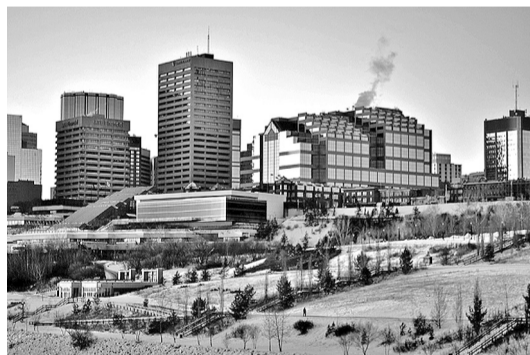
小出 兼久

第24回 (最終回)

グリーンインフラの未来

物事を一方向からだけでなく多角的な視野で見ることが、多くの分野で必要なことである。それは、都市計画についても然りである。例えば現在の社会では、気候という気候変動や温暖化にばかり関心が集中しているが、本来の気候と社会との関係はそれだけにとまらぬ。寒冷地や乾燥地という気候地域で都市の維持向上および経済活動にその地域気候を生かしていくのか。私

て涼しくさせることができているのか、その可能性を探っている。その中で、グリーンインフラは大きな効果をもたらすものとなる。しかしながら、気候とは暑さだけではなく、例えば地理的に冷涼な気候の都市や、冬には厳しい寒さの都市もある。こうした地域の気候にも敏感であるべきランドスケープアーキテクチャーとして、グリーンインフラも含めつつ、日本でも地域に応じた気候戦略と設計を確立し、その実践や研究を促進していくべきではないか。今の時点でも治療法には行われているのだが、統合的な視点と戦略の確立は、まだまだ途上にあるように思えるのだ。



冬の Edmonton 市街。ここでは雪や風景自体が資産であり、その他にアウトドア活動の場やフェスティバルの開催など街をあげて冬を楽しむ工夫が随所でなされている。そしてそれを支えるのは地域気候対策をした都市計画である ©Heidi G

グリーンインフラの未来が大きく開けると感じている。グリーンインフラを語ることは都市を語ることに等しい。そして、その都市は今、重大な岐路に立たされている。そこで次回からは、本連載の続編としてタイトルも「都市とレジリエンス」と新たに、都市とグリーンインフラを含むランドスケープのあり方を探っていくたい。

北国の自負と誇り、その根幹をなすのはエドモントンウィンターシティ戦略であり、住民の参画、角、新規高層建築におけるバルコニーやファサードの仕様、耐風設計など強化、北国の都市設計が柱となっている。重要なのは寒さを敵として認識させないという一貫した方針である。また、市は 2016 年に都市の設計

地域の気候対策としての

ランドスケープアーキテクチャー

あったが、今では、創造的で魅力あふれる冬を楽しむ場所として、世界中から観光客が訪れるようになった。誰もが好んでここでの冬のアウトドア活動にいそんでいる。

筆者：小出兼久 (こいで・かねひさ) NPO 法人日本ゼリスケープデザイン研究協会 (JXDA) 代表理事
備考：記事詳細は JXDA (http://xandscape.jp.org) の環境新聞＋コラム資料参照